

NEWSLETTER NO.4



洪水後のミャンマー 「地域で自立と予防をめざす」助産師さんとお母さんの声

NEWSLETTER NO.3 でご紹介の

CWS Japan&味の素 —「食と健康」国際協力支援プログラム—

NEWSLETTER NO.3でご紹介した、2016年4月より実施している「ミャンマー・エヤワディ地域5歳未満児の栄養改善事業」。その後の様子として、CWS Japanのプログラムに参加する助産師さん、お母さんのたちの声が、現地で活動する伊藤洋子さんから届きました。

地域の人々が、洪水や浸食の影響で家や田畑を失い、とても困難な生活を強いられる中で、お母さん達は「栄養のある食べ物を子ども達に食べさせたい」と、このプロジェクトのプログラム「栄養や野菜の栽培・鶏の育て方」などを意欲的に学び、家族の生活を立て直そうと頑張っています。

Voice:1 ドーエーモー助産師の声☆「村に出産できるクリニックを！」

私はこの事業では衛生教育・栄養教育を担当しています。この地域にはクリニックがないので、病気になると雨季はボートで1時間程かかる隣の村に行くか、ボートで4時間かかる町へ行かなければなりません。今年に入ってから、流産の女性を町の病院へ、途中で亡くなってしまうのではないかと心配しながら運びました。何とか一命をとりとめることができましたが、気が気ではありませんでした。村の女性の多くは家でお産をします。村にはまだ電気が通っていないため、出産の際には大きなろうそくを準備し、ろうそくの明かりで出産します。不衛生な環境で出産しなければならないこともままあります。母子の命のために、この村に、出産ができるクリニックが欲しいと願っています。



ドーエーモー助産師(左の女性)は、いつも地域のお母さんや子どもたちの健康を気遣っています。

Voice:2 マティダウィンさんの声☆「3歳の娘の為に栄養のある食事を作りたい！」



この地域では、洪水のために川の流れが変化し、生活に深刻な影響を受けています。もともと私の家があった場所は、既に川の底に沈んでしまい、昨年、今住んでいる場所に引っ越してきました。洪水の影響で、家だけでなく経営していた精米所も失いました。今は、私が伝統的なミャンマーのおやつを売って、毎日170～260円ほど稼ぎ、夫は、バイクタクシーをして平均1日260円稼いでいます。(ミャンマーの一般の平均月収は約8千円～1万円と言われている)子どもは、4人いますが、子ども達が教育を受けて、将来良い仕事に就けることを願って、一生懸命働いています。3歳の娘がいるので、この事業に参加して新しい知識を得、この子のこれからのために、栄養のある食事を食べさせたいと思っています。

私には5人の子供がいます。夫は漁師で、私が夫の釣ってきた魚を売って生計を立てています。1日260～500円くらいの収入があります。収入は季節によって異なりますが、今は漁業に良い季節なので、日々の暮らしに困ることはありません。でも、病院がとても遠いので、家族が病気にならないか、すごく心配です。去年は鶏を飼っていましたが、洪水で病気になり、10羽全てが死んでしまいました。この事業に参加してまた鶏を飼い、家族が病気にならずに暮らせるよう、栄養のある食事を食べさせたいと思っています。



事業説明会に参加するお母さんたち。家族の未来を考え真剣です。

協働関係の在り方として、CWS Japanのバックオフィスの機能を紹介 「熊本地震・支援団体 活動報告会 in 新宿」 一人と地域の力を活かすために—

7月18日NHK首都圏ニュース放映

7月18日、しんじゅく防災フェスタ2016実行委員会主催の「熊本地震・支援団体 活動報告会in新宿」が、東京YMCA山手コミュニティセンターにて開催されました。この報告会は9月4日に戸山公園で開催される「しんじゅく防災フェスタ2016」のプレイベントとして開催されたものです。タ方のNHK首都圏ニュースでも放映され、マスコミも、その後の熊本へ関心を寄せている事が、うかがえました。

CWS Japanは小美野事務局長が、熊本被災地での活動を日本や世界へ知らせる広報活動の重要性と、そのためのバックオフィスの機能を果たしたCWS Japanの活動を紹介しました。



“くまもん”を前にバックオフィスの重要性について話す小美野事務局長



この報告会は新宿に本拠を置き、一連の熊本地震で被災した人たちを支援する活動を行っている7団体と1企業が参加して行われたものです。現地の様子や活動のポイント等の報告と共に、各団体が現在の被災地の課題と、今後も引き続き支援の必要性がある事、首都圏での防災への備えを訴えました。

CWS Japanの発言に先立ち、共に活動したYMCA山根氏、松本氏が、熊本益城町及び御船町の避難所となった体育館の指定管理が、震災以前からYMCAであった事。震災後、そのまま引き続き地域のひとたちと避難所を運営していった事を報告。活動の報告を内外に伝え、活動を持続させるためのファンディングの重要性を自覚しつつも、激務のなか、広報活動までは手が回らなかった事などの話がありました。

その後で小美野事務局長が、問題解決型のネットワークとしてYMCAと協働し、CWS Japanが広報発信の業務を担った事を報告。現地でフルに活動する団体の持続可能性を維持するため、いかにバックオフィス機能が重要性であるか、そして団体の特性をそれぞれに活かしパートナーシップを組むことによって、さらに力ある活動が行える事を訴えました。

「マルチハザード サマースクール」

—世界の将来を担うリーダー養成講座—

セクターを超えたパートナーシップは大きな力となる

7月19日～22日 於：東北大学 災害科学国際研究所 (IRIDeS)



世界中から集まった大学関係者、修士・博士課程の学生たち40名に講義する小美野事務局長

7月19日～22日、東北大学の災害科学国際研究所(International Research Institute of Disaster Science = IRIDeS)において、環太平洋大学ネットワーク(Association of Pacific Rim Universities = APRU 45の大学・研究機関が参加するネットワーク)が主催する、防災・減災に特化した「第4回 マルチハザード サマースクール」が開催されました。

東北大学 災害科学国際研究所(IRIDeS)は、東日本大震災の被害実態と、その教訓に基づく実践的防災学の国際研究拠点形成を目指し、2012年に設立されました。国内外の大学・研究機関と協力しながら、自然災害科学に関する世界最先端の研究を推進し、国内外の巨大災害の被害軽減に向けて、社会の具体的な問題解決を指向する実践的防災学の礎を築こうとしています。またIRIDeSは、APRUと共に、2013年4月にマルチハザードプログラムを立ち上げました。同研究所はプログラムのハブ機能、事務局を務めています。今回のサマースクールも、これらの活動の一環として開催されました。

CWS Japanの、小美野事務局長は、現場の実施を担うNGOの声の代表として、人道支援および防災減災におけるパートナーシップの重要性を、これからの地球の防災減災のリーダーシップを取る事になる人材に向けて講義しました。

第二次大戦後最悪の人道状況となっている現在、この課題を乗り越えるためには、国やセクターが連携、ビジョンを共有、経済的なムダを最小限にし、この難関にあたらなければならない、そのためのキーワードは「パートナーシップ」である、と世界人道サミットで世界的に共有された事を熱く語りました。

そしてその実践として、熊本被災地でのNGOの活動を日本や世界へ知らせる広報活動の重要性と、そのためのバックオフィスの機能を果たしたCWS Japanのパートナーシップ活動を紹介しました。

また、災害現場の改善や防災減災のために地元市民社会がどのような役割を果たすか、セクターを超えたパートナーシップによって何が解決できるか、そのそれぞれの役割の重要性、その為にそれぞれのセクターが出来る事を、ワークショップによって各セクターの人材と共有しました。ワークショップは小美野事務局長がファシリテーターを務め、参加者を防災・減災に係る5つのステークホルダーグループに分け(行政、大学・研究機関、企業、NGO/NPO、メディア)、それぞれの強み・弱みを話し合い、「強みを更に強化する施策」「弱みを補完する施策」を話し合い、それぞれの立場への理解を深め、今後の方向性を考えました。

プログラムに参加した「将来のリーダー達」が、すべてのステークホルダーに対する理解を深め、プロデューサーとしてリーダーシップを発揮できるように、CWS Japanが願っている事を結びとしました。

8月23,24日にはバンコクで「災害リスク軽減のための第一回アジア科学技術会議」が開かれます。セクターを超えた連携について、広く深く話し合われる事となっており、CWS Japanも参加いたします。